

【 13 】

氏 名	柴 野 昌 山 しば の しょう ざん
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	論 教 博 第 10 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	人 格 形 成 の 構 造

— 教育と社会の基礎理論 —

論文調査委員 (主 査) 教 授 重 松 俊 明 教 授 姫 岡 勤 教 授 前 田 博

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、教育の基礎過程としての人格形成と社会構造との関係を、行動科学的見地から体系的に論じたものである。まず人格形成に相当する従来の諸概念について検討を加え、それに対する社会学的、心理学的アプローチが、いずれも一面的であることを指摘して、人格形成を、社会化・個性化・自律化の総合過程としてとらえようとする。

第2に、人格形成は、社会の構造的要素によって、外的に規定されながら、同時に諸個人の主体的選択によっても、内的に限定される社会的・心理的過程の体系であると考ええる。これは従来の社会学における社会と個人の関係を改めて再検討し、両者を総合的に体系化しようとする意図をもっている。そのために、人格形成に関する学史的検討を、A. コント、H. スпенサー、E. デュルケームに従って行なっている。

第3に、人格形成を構造的に把握するために、人格形成を一つのシステムとしてとらえ、次にそのシステムの存在を決定論的観点から因果関係的に説明しようと考えている。そして下部構造において、人格形成のシステムが、究極的には、社会の経済的下部構造によって決定されるが、基本的には、基体としての社会構造によって決定されることを論述する。上部構造論においては、人格形成に対して、決定作用をもつ社会構造の構成要素を考察し、それらが社会制度という形をとることによって、統制的機能と欲求満足的機能をもつことを明らかにする。さらに、内部構造論によって、人格形成を内的に統合する焦点としての行動的自己について考察している。

第4に、人格形成の存在拘束的メカニズムを考察し、人格形成の構造が、個人を超えて、個人の視界を規定する思惟の体系、またはイデオロギーである点を指摘する。

最後に、人格形成と教育との関係を検討している。教育のめざすべき方向は、心理主義的な適応や、イデオロギーの支配によって決定されるべきではなく、望ましい方向は、人格形成の過程を基礎として探求されねばならない。それは自律化を発達させる方向である。自律性、独自性、一体性、自己受容性、生産

性を心理的要件とし、拘束と自発、規制と自由との均衡が保証される統制・満足状況を社会的要件とする一つの発展過程である。

以上、本論文は教育と社会との関係を考えるための基礎的理論として、人格形成を検討したものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人格形成の構造という教育の中心問題を取り扱い、人格の内部構造の中核である行動的自己というミクロの世界から、社会経済のマクロな領域にまで及ぶ大きな体系をなしている。それだけに焦点がややあいまいになった憾みはあるが、全体を通して、論理的整合性は失っていない。

まず、人格形成の存在形態と作為様式を明らかにするために、「相互依存と均衡主義」に立ついわゆる構造機能理論を排し、人格形成の構造的諸要因相互の間の決定関係を分析し、優位決定因の序列化を行なう因果的相互作用の観点を取り入れた社会学的決定論の立場に立つことを言明する。

そして、人格形成を社会化 socialization と個性化 individualization と自律化 autonomization の三つの次元でとらえている。これまでのパースナリティーの社会学的分析が、多く社会化と個性化の二次元でとらえて説明しているのに対し、自律化という契機を特に取りあげて、三次元のシステムとして人格形成を説明しようとしているところに、この人格形成論の特色の一つがある。自律性は社会化と個性化を統一する人格の原理と見なされる。こうして、自律性は、心理的には、自己一体性、自己受容性、生産性、自己実現の能力をもつことであり、社会的には、自己 self を中核として生活構造 life structure を組織化することである。そして生活構造とは行動、自己をめぐる組織化された外部構造と内部構造の相互作用体系であるとして、詳細な自律性の説明を行なっている。

つぎに、人格形成を社会体系とパースナリティー体系とを結合する媒介体系としてとらえている点は、注目に値しよう。由来、社会と個人は次元を異にし無媒介に統一されると説明されているのに対し、社会過程と個人過程の両過程の統一としての人格形成を媒介体系として位置づけることによって、社会と個人を結びつける論理を立てると同時に、両者の関係を社会的・心理的に、かつ実証的に研究する原理を新しく示したことは本論文の功績と言ってよい。

以上の点から、本論文は、人格形成という教育にとっての中心問題に対する優れた論文であると判定される。よって教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。